

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370331

研究課題名(和文) 19 - 20世紀転換期にみる消費文化と下層中産階級の表象

研究課題名(英文) The Representations of the Lower Middle Class and Consumer Culture around the Turn of the Century

研究代表者

三宅 敦子 (MIYAKE, ATSUKO)

西南学院大学・文学部・教授

研究者番号：10368970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：19 - 20世紀転換期に活躍したH.G.ウェルズの半自伝的小説には、(1)19世紀末の下層中産階級の生活、(2)それ以前のキーワードでもあった進歩を信じて、社会の階段をよじ登ろうとする下層中産階級の様子、(3)確実に零落しつつも彼らの参入を拒む上流階級の社会的な攻防、(4)第三次産業の登場により変化する人々の考えや社会の在り方、という現代のイギリス社会を理解するうえで、極めて重要な要素が描かれている。従って、これまでの研究例が非常に少ないが、もっと研究する価値がある分野である。

研究成果の概要(英文)：Semiautobiographical novels by H.G.Wells (1866-1946), especially Tono-Bungay, represent four subjects which are crucial in understanding English society at the present time: everyday life of the lower middle class at the turn of the century, their brave efforts to climb up the social ladder, the situation in which the ruined aristocracy was placed and their struggle, and the transformations of English society and people by introducing the tertiary industry.

The research on H.G.Wells' work has been conducted mainly on his science fictions. However, his less focused novels are equally worth for studying in order to understand the essence of English culture.

研究分野：英文学

キーワード：19世紀 イギリス文化 イギリス文学

1. 研究開始当初の背景

H15年度に西南学院大学着任以降、研究代表者として3件の科研費を受給し、19世紀の中産階級の階級意識形成とインテリア表象との関連性をテーマにした研究を行ってきた結果、これまでに以下の知見を得た。

19世紀後期に、安価な家具セットの登場により、家具が下層中産階級にとって手に入りやすいものとなった。また1882年に制定された「既婚女性資産法」により、女性も自由に使える自分の財産で消費活動に参入できるようになった。その流れの中で、家具などのインテリア類を購入するという消費活動が、中産階級としてのアイデンティティを確実にする手段となってきた。換言すると、中産階級という社会的ステータスを、金銭で購入できるという感覚が発生したのである。

さらに、同時代には、製造業からサービス業への転換が生じていることをうかがわせるような表象が、小説内に登場することを見出した。例えば *Gissing* の小説では、広告業を営む男性が登場する上、登場人物が広告を出すという行為が、比較的頻繁に小説に登場することに気付いた。

そこで、これまでの研究で発見した階級意識形成とインテリアとの関連性を、階級意識形成と消費文化という枠に広げる一方で、対象とする時代・階級を絞り、特に19-20世紀転換期の消費文化と下層中産階級の階級意識形成との関連性についての研究へと発展させることで、あらたな知見が得られ更なる研究へと展開できるのではないかと考えた。以上が今回の研究を提案するに至った背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19-20世紀転換期に下層中産階級の階級意識形成が、消費文化とどのように結びついていたのか、また階級意識形成との関係において、当時の消費活動が内包する文化的機能・意義が下層中産階級出身の作家、特に *H.G.Wells* の小説にどのように表象されていたかを考察し、小説という形式が、いかにその時代の文化を反映してきたかを考察・検証することである。*Wells* に関する研究は、「S.F.の父」としてサイエンス・フィクションの研究が中心で、今回対象とする半自伝的小説の研究は、進んでいないことも、*Wells* を研究対象とする理由の一つである。

3. 研究の方法

本研究は以下の二つの手順にしたがって行ったが、これらは互いに深く関連するため、並行して実施することで、その関連を精査し、理解を深めた。

(1) 当時の消費社会の特徴（特に広告産業や新規ビジネスの発展、買い物文化の発展、下層中産階級出身の販売員としての、ビジネス界への参入など）を文化史的に探った。

(2) 上記作家の小説を、前項(1)で述べた文脈で研究した。

これら2種類の手順で研究を遂行するために必要な資料は、国内及び海外の図書館で蔵書やオンライン・データベースを利用したり、関連図書を購入するなどして取得した。

4. 研究成果

本研究で取り上げた *H.G.Wells* は、丁稚奉公をしていた経験をもとに、小売り業に携わる男性を主人公とした小説を4作品執筆した。これらは *The Wheels of Chance*(1895)、*Kipps*(1905)、*Tono-Bungay*(1909)、*The History of Mr Polly*(1910)であり、それぞれタッチが異なるが、中でも傑作とされるのは *Tono-Bungay*(1909)である。この小説では、今回の研究テーマとした階級と消費、下層中産階級が参入できた新たな職業についての、リアリズム的手法に基づいた表象が非常に多いため、この小説を中心に研究を進めた。

小説の主人公ジョージは物ごころつくまで、女中奉公をしていた母と貴族の館で生活する。ある事件を契機に、薬品販売の店を経営する父方の叔父エドワード・ポンダレーヴォに預けられる。一儲けして成上ろうとする叔父の視点と、思い通りにならない人生に迷い、叔父に協力しつつも、叔父の生き方を批判的に冷静に見つめる主人公ジョージの視点という、異なった2つの視点をもとに物語は進行する

(1) ポンダレーヴォ叔父の物語

イングランド南東部の田舎町で薬品店を営むポンダレーヴォ叔父は、新たな商売方法の実践に余念がない。肉屋や食料雑貨屋のように実体のある製品を販売するのではなく、薬品という中身が判然としない商品を扱っている。薬の販売には広告を利用し、みんなが必要とするものを買占めることで値段を釣りあげれば、自の儲けが増えると考えている。

株に手をだし、ジョージのために彼の母が預けた金にも手をつけ、失敗し、破産。無一文でロンドン出る。その後 *Tono-Bungay*(トノ・バンゲイ)という身体に有害な成分を含む強壯剤を、その事実をごまかした誇大広告で宣伝し、大儲けする。成功者となった叔父は時の人となり、零落した貴族の屋敷を買い取り名士の集まりに集い、挙句、政治家に金を握らせ爵位を金で買おうとまでする。しかし、マナーや教養など、金で買えない上流階級の証は手に入れることができない。調子に乗り浮気までするが、犯した数々の詐欺が暴かれスキャンダルになり、ついには破産する。

この人物はジョージの助けで、彼が開発した飛行機でフランスに逃亡し、そこで客死する。小説の最初から、ナポレオンと関連付けて表象されている。

(2) 主人公ジョージの物語

子供時代を過ごした貴族の館で、上流階級と教養への憧れを持つ。知識を身に付けることを渴望し、ロンドンで大学にも通うが、成功しない。いろいろと迷いつつ送るパツとしない人生の中で、唯一の身内となるポンダレーヴォ叔父の偽薬製造販売に、嫌々ながらも加担することになる。それは恋人メアリアンと結婚するためであった。メアリアンにひかれたのは、出会ったのが美術館の前で、自分と同じく教養に対する憧れを持つ女性だと思ったからであった。しかしそれは大きな誤解で、メアリアンは背伸びをして偽りのイメージを演出することで生きている、典型的な下層中産階級の間人であった。結婚後すぐにメアリアンの本質に気づき、やがて離婚する。

ジョージは偽薬 *Tono-Bungay* で大儲けし、どんどん調子に乗っていく叔父についていくことができなくなり、イメージでごまかせない、もっと実体のある科学への関心—それはもともと持っていたものではあったが一が高じて、飛行機開発を手掛けるようになる。そんな時に子供時代、高根の花だった憧れの女性ベアトリスと再会する。落ちぶれた貴族であるベアトリスに、ジョージは蓄財できた今、社会的に同じ地位になったと思い、求婚する。しかしベアトリスは詳しい理由を話さずに、ジョージのことは愛しているが結婚はできないと拒絶する。

小説 *Tono-Bungay* は、典型的な成上りの下層中産階級男性であるポンダレーヴォ叔父と、その生き方に疑問を感じつつ、同種の憧れを別の形で抱えるジョージの生涯を描いているが、各エピソードを分析すると以下のような解釈が可能である。

< 1 > 実体のないものを販売する第三次産業の登場と、演出したイメージによりアイデンティティを構築する下層中産階級との類似性

この小説にはいくつもの商売が対比的に登場する。時代に取り残された古いタイプの商業として、パン屋や肉屋、食料雑貨店などが描かれる一方、ポンダレーヴォ叔父が関わる薬品店、広告業、金融業などは、新しく注目し値する商売だとして、ポンダレーヴォ叔父は次々に手を出していく。実体のないものを売り買いするこれらの産業と、家具や不動産といった外見をつくろうためのツールを金で購入し、上流階級に属する人間であるというイメージを演出することで、自己のアイデンティティ形成を図る叔父には、産業と人格という実態の違いはあるものの、そこには明らかな類似性が見られる。

広告業は、今日では就職先として学生の間で人気の高い業界であるが、当時は胡散臭いものと考えられていた。その捉え方は、19世紀後半に拡大したイギリスのチョコレート

会社の広告に、如実に表れている（雑誌論文①参照）。チョコレートがいかにか栄養価が高く飲むに値する飲み物であるかや、不純な添加物を含まないことを言葉で宣伝する広告から、どのような場面でココアが消費されるのかをイメージで受け手に訴えるものへと変化する。Deborah Cadbury 著 *Chocolate Wars* (2010) によると、イギリスの三大チョコレートメーカー (Cadbury 社, Rowntree 社, Fry 社) は、創業者一族がすべてクウェーカー教徒で、ビジネスに誠実さを要求する傾向があったため、大げさな広告を盛大に打つことに抵抗があった。このようにネガティブなイメージが付随していた広告業が、成上ったポンダレーヴォ叔父の張りぼてとしての像の表象に効果的に使用されている。

< 2 > アメリカ人と下層中産階級のイギリス人との類似性

この点については、研究開始時には予期していなかったが、研究を完了した現在では以下のような成果を得ている。

ポンダレーヴォ叔父が、上流階級の記号的な不動産や室内装飾品などを購入するさまが、成上りのアメリカ人の行動と共通するものとして描かれている。ヨーロッパ文化を侵略するアメリカ人については、Henry James や Oscar Wilde の作品にもみられる（研究発表①②、雑誌論文②）ため、この時代の文学において、ひとつの重要なテーマとなっていたと考えられる。

しかし莫大な財産を持参しての婚姻によって貴族に昇格できる裕福なアメリカ人女性と異なり、ポンダレーヴォ叔父やジョージは男性であるため、その手段を用いることができず、消費活動や金銭により上げられる社会の階段に上限があることを思い知り、悩む。

この点は、同様に下層中産階級で、社会的上昇志向の強い女性が主人公となる Gissing の小説との違いがあらわれる点である。

< 3 > 金で買えない上流階級の指標としての教養

上流階級への参入を目指す際、不動産や家具など物質的なものは購入することができるが、教養やマナーといった精神や知性に基盤を置く要素は購入することができない。この段階に至り、それまで大変仲良かったポンダレーヴォ叔父とその妻スーザンの関係が変化する。スーザンはひたすら上流社会への仲間入りを目指す夫についてゆけなくなり、ポンダレーヴォ叔父は浮気をし、二人の関係はそのまま改善することなく、叔父は客死する。

このように Wells の小説 *Tono-Bungay* には、「19世紀末の下層中産階級の生活」、「それ以前のキーワードでもあった進歩を信じて、社会の階段をよじ登ろうとする下層中産階級の様子」、「確実に零落しつつも彼らの参入を拒む上流階級の社会的な攻防」の3つが

描かれている。

世紀転換期のイギリス社会を舞台に、実体のない経済活動への移行と、社会的成功を目指す中で、その動きに振り回される下層中産階級を描く Wells の小説は、これまでほとんど研究されてこなかった。そのため今回取り上げたようなテーマの研究報告は、英米をはじめとする海外のみならず国内でもまだ数が少なく、本科学研究の開始とほぼ同時期に始まったばかりである。しかし、現代に続くイギリス社会の根幹（階級とは何かや、金銭がすべてではないという価値観など）を理解するうえで、極めて重要な研究対象のひとつであると確信する。Wells の小説には、前述のように Henry James や Oscar Wilde の作品と共通する点もあり、今後の比較研究に繋がりたい。

上記の成果については、今後論文にまとめ発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①三宅敦子、研究ノート「18 世紀から 20 世紀にかけてのココアの広告の変遷—The John Johnson Collection of Printed Ephemera に所蔵された製菓会社の広告についての研究」、『西南学院大学英語英文学論叢』、2015、第 55 卷 1・2・3 合併号、147-161.

②三宅敦子、「ドリアン・グレイの肖像』に描かれた世紀末の視覚芸術文化」、『オスカー・ワイルド研究』査読有、14 卷、2015、45-55.

[学会発表] (計 2 件)

①三宅敦子、“The Cultural Context of Two Collections in *The Spoils of Poynton*(1896) by Henry James”, Victorian Interdisciplinary Studies Association of the Western United States 2014 Conference, 2014 年 10 月 18 日, California State University at Fullerton.

②三宅敦子、シンポジウム「流行/装飾/マテリアル—ワイルドと世紀末の消費文化」、日本ワイルド協会、2014 年 11 月 29 日、青山学院大学.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他] なし

6. 研究組織

本研究の研究組織は、以下の研究代表者のみで構成されていた。

(1) 研究代表者

三宅敦子 (MIYAKE, Atsuko)

西南学院大学文学部英文学科教授

研究者番号：10368970